

「多摩の物語」(民話・昔話)の掘り起し調査と
“語り”の実演

2016年

平野 啓子
美しい多摩川フォーラム 副会長・教育文化部会長

共同研究者：稲垣 昂志、加古 万里子、川井 方子、富田 和美、富田 元子、
馬場 エリカ、柳澤 淳子、山田 圭一、渡辺 真記

美しい多摩川フォーラム

新発見！

多摩の物語

羽村・八王子・日野・小平・小金井・三鷹・
多摩・府中・調布・狛江・大田・川崎で出会う物語

はじめに

多摩川はかつて水量が多く、流域では、今以上に住む人の暮らしと直接結びついていました。古来、民話のみならず、神話、万葉集も伝えられています。川の氾濫、洪水などに幾度も遭い、自然と向き合ってきた歴史もあります。また、江戸への物資の輸送は、流通の発達と繁栄をもたらし、人口の膨らんだ江戸の町の水不足解消をはじめとして、今も東京の重要な水源になっています。

美しい多摩川フォーラムでは、多摩川流域の自然、食、文化が調和した質の高い「観光ビジネス」を創出し、都市部や農村部など様々な顔を持つ地域どうしでの「観光交流人口の増加」による地域の活性化を目指す取り組みの中で、特に、地域に伝わるいわれや昔話、食文化、歳時など、地域独特で、かつ地域の人々が大事に受け継いでいるものを、地域の宝（資源）と捉えて着目し、観光や地域振興の素材として活用してはどうかと考え、実行委員会を立ち上げ、まず、青梅、あきる野、奥多摩で活動を行い、平成二十六年に一冊目の「多摩の物語」

として刊行し、ご好評をいただいております。

実行委員会のメンバーが、現地に出向いて取材し、その土地で出会った素敵な物語や様々な文化を、よりわかりやすく「語り」で伝えるために、訪問者の立場で編み、物語作品（「多摩の物語」）に仕上げたものです。

これは、語るためのお話です。

今回は、多摩川の中・下流域、羽村・八王子・日野・小平・小金井・三鷹・多摩・府中・調布・狛江・大田・川崎を訪問して出会った数々の物語です。歩く道々で出会った古くからの言い伝えや行事、とても不思議な物語、そして、防災の視点も含まれた水害のエピソードも登場します。この語りをお聴きになった方が、その魅力を感じて、実際に現地を訪れていただき、さらに先人の想いをも感じていただければ、何よりの喜びです。

それぞれの地域で、たくさんの方々に、取材のご協力をいただきました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

平成二十八年三月

美しい多摩川フォーラム副会長 平野啓子

目次

一、羽村・狛江・川崎編	5
玉川上水の出発点 羽村	5
堤防を守った羽村の消防団の水防活動	9
川崎住民の願いがかなった築堤に桜が	18
二、八王子・日野編	20
民話の息づく街 八王子・日野の物語	20
うなぎを食べない地区	21
河童に教わった石田散薬	23
藤蔵・勝五郎生まれ変わり物語	26
三、小平・小金井・三鷹編	31
小平・小金井・三鷹と玉川上水	31
小金井から小平にもらった場所	34
力持ちの長五郎	37
宇賀神様のはなし	39

四、府中・調布・多摩・狛江編

神話・万葉集・民話・災害教訓の伝わる街

松はきらい

おみたらしの大蛇

調布伝説 広福長者の話

河童のホオズキ

五、大田編

穴森神社・大森神社の不思議な物語・

多摩川の民話・伝承

御神砂物語

クラゲ骨なし

大森神社のおはなし

ムロセンゲンの話

多摩川の医者を迎えにきた狐のおはなし

41

41

42

43

45

49

52

52

53

56

59

62

64

一、羽村・狛江・川崎編

玉川上水の出発点 羽村

東京には、かつて「人食い川」と呼ばれていた川や「あばれ川」と呼ばれた川があります。

「人食い川」というのは、一般河川ではなく、今もある玉川上水のこと、「あばれ川」とは多摩川のことです。

羽村には、多摩川の流れが南に向かって急にカーブしているところがあります。その蛇行の具合によって、水が多く集まってくるので、江戸時代、そこに玉川上水の取水口を作ることになりました。それが、羽村取水堰です。

この取水堰を出発点とする玉川上水は、江戸時代に市中



へ水を引くために作られたものですが、昔は、水量が豊富で、ひとたびこの上水に流されると、命を落としてしまうほどの急流だったと言います。「人食い川」と言われる所以です。一方、その美しさから「羽衣の堰」と呼ばれた時代もあり、羽衣の堰としてのアピールをしようと頑張っている地元の方々もいらっしやいます。

青森県出身の文豪太宰治が三鷹に居を構えて、かの名作「走れメロス」を執筆したのは、玉川上水の近くでしたが、その後、太宰が美容師山崎富栄と恋仲になり、玉川上水と一緒に身を投げて心中したのは、有名な話です。

そんなエピソードまで生んでしまった「人食い川」でしたが、その豊富な水流は、かつて江戸市中への飲料水の供給を安定させただけではなく、武蔵野台地の新田開発の後には、分水路を通って、水田へも水を供給し、豊かな恵みをもたらしました。その後、水質汚染などの問題があり、そのことで多摩地域が重要な水源地であることが強く認識され、その水源管理のために、これまで神奈川県下であった三多摩地区は、一八九三年東京府へと移管されました。水が大きなきっかけでした。

今、東京の水道水はおいしいと言われていますね。蛇口をひねってすぐおいしい水が飲めます。その水には多摩川のお水も入っています。

多摩川のおいしいきれいな水が、羽村を出発点にして、玉川上水に送り込まれ、東京都の上水道に供給されています。

羽村の取水堰は昔も今も、玉川上水の出発点になっているのです。

この取水堰には、本流の多摩川が増水した時に、門が破壊されて洪水が起ることはないようにとの、工夫がされています。固定してある堰と固定していない堰とが組み合わせられているのです。

杭に、丸太などを横に渡して、丸太の屏、あるいは柵と



いいでしょうか、そのようにしてある部分があり、多摩川が増水時には、それを取り払って、丸太は川に流してしまうのです。これにより、固定の堰に当たる水の力

が弱まります。「投渡堰なげわたしせき」と言われるこの工法が、なんと江戸の当初から今まで続いているといえますから、驚きです。いかに優れた工法であるかがわかりますね。そして、それが土木学会選奨、土木遺産に都内で唯一認定されました。

さて、今度は、「あばれ川」、多摩川のお話に移りましょう。

多摩川は、かつては水量も多く、増水や氾濫もたびたび起こったため、「あばれ川」と呼ばれていました。

今では川が増水した時にサイレンが鳴りますが、昭和四十一年までは水位が上がると火事の時のように半鐘を鳴らしたのだそうです。その音が今も耳に残っている方が羽村にはいらっしやいます。多摩川の氾濫と向きあった歴史があるのですね。

江戸時代からの水害の歴史を見ても、枚挙にいとまがありません。

その一つ、狛江と羽村のお話、そして、もう一つ、築堤に桜を植えた川崎のお話をいたしましょう。

堤防を守った羽村の消防団の水防活動

一九七四年（昭和四十九年）九月一日、台風一六号により多摩川が増水しました。この時、多摩川の中流狛江付近では、堤防が決壊し、川沿いの家が十九棟、濁流に呑み込まれて流された悲惨な出来事が起こりました。水量は一秒間におよそ四千トン、木造家屋が、まるで岸からえぐり取られるかのように、そのままの形でさらわれ、みるみる流れに消えていく姿がテレビに映し出され、日本国中の人が自然の驚異を感じたのでした。この災害は後にテレビドラマにもなりました。

決壊した宿河原堰の跡地には、未来にこのような被害を起こさないようにとの教訓を込めて、「多摩川決壊の碑」が立てられました。今も、まるで空に誓いを立てるかのように、三角錐の碑がすきつと空に向かって立っています。

ちょうど、同じそのとき、狛江より上流の方で、必死の水防活動が行われて

いました。

東京・羽村。

玉川上水羽村取水堰のやや上流は、川の流れが、南に向かって大きく蛇行しています。

そのあたりは、昔から桜の木が、岸边に沿って立っていました。蛇行して水が多く集まるからこそ、付近に取水堰ができた：裏を返せば、雨量の多い時には、そのあたりに、どっと大量の濁流が集まってきて、堤防にぶち当たるのです。

前日深夜から降り続く豪雨は、多摩川の水流が毎秒二千トンとまでいわれるほどに達していました。

その膨れ上がった勢いのある水の帯は、蛇行する川の外側の堤防に激しくぶつかり、砂利でしつかりと固めてある堤防を削り取って行きます。

当時の消防団副団長の井上篤太郎さんは、多摩川の川岸を見に行き、たいへ

んな事態であることがわかりました。

早速団員を集めて、これから行う水防活動について、説明をし、指示を出しました。

「土嚢を用意しろ！それから、近くの木を切ってきて集めるんだ！」

付近には、アカシアの木など、細木の広葉樹がいくらかでもありました。

「その木を束ねて、根元を縄で縛るんだ。」

その縄の端を長くのばしておいて、桜の木に巻きつけて引っ張る。

そうしてその後、枝葉の広がっている方をてっぺんにして、川上に向けて、投げ込むんだ。

そうすると、水の勢いで、木の束がぐぐつと桜の幹を軸に、一八〇度、川下の方に回って、護岸にぴたっと張り付く。

そうしたら、護岸と枝の間に、土嚢を投げ込むんだ。

いいか、決して、直接土嚢を川に投げ込んだじゃだめだぞ。

こんな、流れじゃ、土嚢はどんどんと流されてしまうからな。必ず、岸と枝の間に入れるんだぞ！」

篤太郎さんは、そのように手順を説明し役割分担を決めると、すぐに現場に向かいました。

降りしきる雨の中、川岸に樹木が集められてきます。

根元をぐっと縄で縛ります。その縄の端を持って、団員が桜の木に向かってかけていきます。そしてひと抱えもある太い桜の幹に、縄の端を巻きつけて、全身の体重をかけて、ぐぐっと引っ張ります。

篤太郎さんが大声をあげて、指揮を執って行きます。

「縄、しっかり持ってろーっ」

「おお！」

「そしてそのまま待ってろーっ」

「よーし、木を投げ込めーっ！」

木の束を持った数人の団員が、枝葉の方を川の上流に向けてぼんと投げ込みます。

木の束が、恐ろしいほどの力強さでグーッと一八〇度反転して、護岸に張り付きます。

「土嚢を入れろ！」

土嚢が、護岸と枝の間に投げ込まれていきます。

縄を引っ張って支えていた団員は、縄の端をほどけないように括り付けて縛り、すぐに、隣の桜の木に走っていきます。

また、次の桜の幹を基点に括った樹木の束が投げ込まれていき、ぐーっと木の束が回って、また土嚢が放り込まれていきます。

こうして、桜の木、そして次の桜の木と、桜の木から桜の木に移って、作業が繰り返されていきました。

雨が止んだのは、その二日後。

この間、篤太郎さんの陣頭指揮のもと、団員は、グループで交代して、わずかの仮眠をとっては、作業を進めて行きました。

羽村の多摩川の護岸は、広葉樹の束と、それに押さえつけられた土嚢とで、守られていました。

翌年、篤太郎さんは、消防団長に就任をしてその後、羽村町が、羽村市となった時に、初代羽村市長に就任されました。

篤太郎さんは、現在（平成二十七年）八十五歳。今も羽村にお住まいです。

四年前に私がご自宅を訪問したときに奥様がおいしいお茶を入れて下さり、そして篤太郎さんは、当時を振り返って、それはそれは長い時間、貴重なお話をお聞かせくださいました。

あの増水の時にとった方法は、木を流すと書いて、「木流し工法」というのだそうです。

ところで、実は、消防団で、その訓練はしていませんでした。

木流し工法は、篤太郎さんが農業で利用していた方法でした。

篤太郎さんは、農家のお生まれです。

昔は、広い水田をお持ちで、多くの人を小作人として抱えていらっしやいました。

農業を営んでいるうちに、農業用水の増水のたびに、用水路を守る手法をひとつひとつ覚えて行きました。

その中で、一番効果があったのが、「木流し工法」だったそうです。

特に台風シーズンに枝葉が広がっている広葉樹を使うのが良いのだそうです。

それが、一般河川に役立つかどうかわからなかったが、自分の知っている範囲の一番強力な方法として、とっさに、「これだ！」と思ったそうです。

しかも、岸に桜の木があったからこそ、そして、付近にアカシアの群生があったからこそ、木流し工法をやろうと決断できました。

樹木が、堤防を守ったのです。

そのことにより、すぐ下流の外側にある玉川上水への洪水も防ぐことができたのではないだろうか、と篤太郎さんはおっしゃいました。

篤太郎さんは、このようにおっしゃいます。

河川の水防には、周囲に樹木があることが必要だと。

今は、砂利の堤防などほとんどなく、木流し工法は使うことはまずない、それでも、何かの時に樹木は人の助けになるのではないかと。

「例えばね、洪水で人が流されそうになった時に、木があれば掴つかまることもできるんだよ。だから、もし、よそから、河川の水防に何か必要かって聞かれたら、まず、樹木だ、と私は答えるよ」



桜は、今は、大人の腕で二抱えもある太い老木となっていますが、春になると美しく川沿いを彩ります。

付近の樹木は当時に比べてだいぶ少なくなったようですが、それでも、四季折々の表情を見せてくれます。

その対岸が、今、桜づつみ公園となって、春には、広い河川敷に多くの人が訪れて憩う人々の姿が見られます。

ここを歩くと私も時間を忘れてしまう。足を踏み入れた途端に、歩く速さが急にゆっくりとなってしまう。そんな、安らぎに包まれる、桜の札所七十三番。七十二番の羽村取水堰・玉川上水とセットでお散歩するのが私のお勧めです。



川崎住民の願いがかなった築堤に桜が

そうそう、最近知ったのですが、多摩川の氾濫に苦しんだ川崎の人々が、かつて、神奈川県庁に、堤防を作らせてほしい、と陳情したそうです。でも、築堤の許可を得るのは至難の業でした。その陳情の時に、当時の住民が運動の仲間の目印として、農作業の時に使う編み笠を全員かぶって、何百人もの人が大挙してつめかけたので、「アミガサ事件」と呼ばれました。一九一四年（大正三年）のことです。その二年後、神奈川県知事に就任した有吉忠一ありよしちゆういちは、就任後まもなく多摩川の堤防を自ら視察しました。「東京の堤防よりも低いじゃないか」とその堤を見て、改修をすることを決めました。国からの築堤許可が困難だったため、沿道の道路に盛り土をして、道路の修復として行ったのです。堤防が出来上がったのが、昭和四年。その翌年に、神奈川と東京の自治体とで「大摩川愛桜会」を立ち上げ、堤防に桜を植えることにしました。江戸時代に、「桜

を植えると、花見客で堤の地盤が踏み固められ、桜の花びらで水も浄化する」という言い伝えが信じられていたのでその由来を受けてのことでした。その後、様々な団体や会社から、桜が寄贈されています。

築堤の記念碑が、東急東横線「多摩川駅」のすぐ近くにあり、そのあたり一帯には、東急電鉄から寄贈された桜二百本が植えられ、毎年の春を彩ります。

羽村の多摩川べりの桜が、「大摩川愛桜会」の運動によるものかどうかはわかりません。

けれども、それぞれの時代に、多摩川と桜とを結びつけて、ともに暮らすことを考えた人たちがいて、今があります。

先人たちの想いを受け止めながら、向こう百年の未来につながることを、美しい多摩川フォーラムでできたらと思えます。



(平野)

民話の息づく街 八王子・日野の物語

昨年（平成二十六年）、私達日本人が驚いたニュースの一つに、ニホンウナギが国際機関（国際自然保護連盟）によって絶滅危惧種に指定されたというものがあります。もう、うなぎは食べられなくなってしまふのかと嘆く声が、マスコミを賑わしました。

一方で、世界のうなぎの七割を消費しているうなぎ好きのこの日本に、一切食べない習わしの地区が八か所あり、その一つが、日野市の栄町だという事も報道されました。なぜ食べないのか早速取材に出かけました。

日野市栄町は多摩川に隣接する地区で、その一角は昔、四谷村と呼ばれていました。この四谷村の人々がウナギを食べないのだそうです。その地区の中心に日野宮

神社があります。秋祭り準備に忙しい日野宮神社を訪ねて、氏子会代表の小峯さんにお話を伺いました。こんな民話が伝わっているそうです。

うなぎを食べない地区

今はすっかり住宅地になっているこの地区は、一昔前までは、一面田んぼが広がっていました。丁度稲穂が実るころ多摩川が氾濫して、稲がだいなしになる災害が度々起こりました。

ある年、大雨が降って、またまた多摩川の土手が崩れそうになりました。村人は懸命に土嚢を積んで守ろうとしましたが、ついに人の力ではどうにもならなくなったその時、どこからともなくウナギの大群が現れたのです。そして水の勢いで開きそうになった土手の穴へぎっしり入り込み、土手を守ってくれました。おかげで、四谷村は災害を免れました。

村人は、これは日野宮神社のご本尊である虚空蔵菩薩さまのお使いとしてウナギが助けに来てくれたのだと考えました。それ以来、四谷村の人々は、決してウナギを食べないことにしたのだそうです。

ちなみに日野宮神社に安置されているこの虚空蔵菩薩様のお召し物、この両袖の辺がウナギのように見えませんか。



小峯さんご一家もウナギを食べないそうです。この地区の約四百世帯の中、地元の人々の百二、三十世帯はこの慣わしを守っているとのことでした。秋祭りの日には、この言伝えを忘れないようにと、こんなタオルが配られました。

丸の中に、うなぎがデザインされているのが、分かりますでしょうか。



ところで日野と言えば新撰組副長の土方歳三が有名ですが、実家の土方家は大匠と呼ばれるほどの豪農で、その家は今では土方歳三資料館となっています。

実は、土方家は、農業の傍ら「石田散薬」という打ち身や骨折に効く粉薬を、手広く製造販売していました。歳三も若い頃にはこの薬の行商に出ていたといわれています。

家伝の秘薬「石田散薬」には、こんな言伝えがあります。

一つは、昔々、土方家当主が、夢枕に立った河童明神から製法を伝授されたというものです。もう一つは、八王子の民俗学者、菊池正氏が『とんとんむかし』（東京新聞出版局）の中にまとめられた話の一つで、やはり河童の出てくる物語が残っています。

河童に教わった石田散薬

とんとんむかし、日野宿の在石田村に隼人という郷士がおった。ふだんは医

薬をもって生業としていたが、もともとは武家の出で、由緒ある格式をもった人物じゃった。

ある日の夕暮れ、多摩川の板橋を渡っていた時、ふいに、橋の下から手が伸びて、隼人の片足をつかんだ。隼人は「さては、日頃から耳にしている多摩川河童のいたずらだな」と気づくと、力任せにその手を引っ張った。すると、ポキンという音がして、手だけでもげてしまったんじゃと。隼人はその手を持ち帰ると、薬棚に置いておいた。

その夜、密かに河童がやって来て、泣きながら「どうか、手を返してください」と頼んだ。隼人は「これより、いたずらをせぬなら返してやろう」と言うのと、「もう決していたずらはいたしません」と約束した。

そこで手を返してやると、河童は大喜びして、骨つぎの妙薬を残していったそうじゃ。この薬はたいそうすぐれた効能で、評判は江戸にまで聞こえたといわれておる。へい、おしめえ。

〈引用作品〉「とんとんむかし」 菊池正 東京新聞出版局

実際、土方家の当主は代々漢方の心得のある人でした。石田散薬は一七〇〇年代から、なんと一九四八年まで、約二五〇年間作り続けられました。薬事法の改正で、今では売られることはなくなりましたが、その製法は受け継がれています。

土方歳三資料館には、「石田散薬」の昔の製造道具が展示されています。

また、この資料館と日野市郷土資料館は、「石田散薬作り」の催しを、毎年夏に行っています。

その催しで作ったという薬が下の写真です。真っ黒な粉末の飲み薬で、牛革草（別名ミゾソバ）という川の土手に生えている野草を黒焼きにして作るのだそうです。誰でも申込み順に参加できると聞きました。

さて最後は、世にも不思議な「藤蔵・勝五郎生まれ変わり物語」です。



昨年（平成二十六年）の十月に、高幡不動尊の五重塔（下の写真）、この地下ホールで、第六回藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日イベントが、二百名の参加者を集めて行われました。私も行ってまいりました。今年の十月十日で勝五郎生誕二百年になるということで、大変な盛り上がり様でした。まずはその「生まれ変わり物語」をお聞き下さり。



藤蔵・勝五郎生まれ変わり物語

これは今から丁度二百年前、江戸時代に本当にあったお話です。

今では八王子市東中野となっておりますが、当時は中野村と呼ばれていた所に、八歳になる男の子がいました。名前は勝五郎。ある日、姉ふさと兄乙次郎と遊

んでいたとき、突然聞きました。「ねえ、この家に生まれる前は、どこの家の子どもだったの」「変なことを聞く子ね。お前はどうなんだ」と二人は聞き返しました。

勝五郎は、「おれは、もとは程久保村（今の日野市程久保）の久兵衛と言う人の子で、名前は藤蔵と言った。六つの時、疱瘡にかかって一度死んだ。でも、またこの家に生まれてきたんだ」と言うのです。可笑しなことを言う子だと、姉と兄は両親とおばあさんに知らせました。おばあさんが優しく問いかけると、勝五郎は、こんなことを話しました。「死んだあとは、白髪のおじいさんに連れられて、遠くの間や川の上をふわふわと飛び回っていた。そのうちにそのおじいさんが、死んで三年が経つからそろそろ生まれ変われ、と言ってこのうちに来てきたんだ。三日位かまどの側にいたけど、その時お母が江戸へ働きに行く話をしていたよ。そしていつの間にかお母のお腹に入って、このうちの子になったんだ」こう話しました。確かに江戸へ行く話はしたことがあり、両親

は驚きました。

すっかり話してしまうと、勝五郎は「もといた程久保村に行ってみよう」と言い出しました。そこである日、おばあさんは勝五郎を連れて程久保村へ行ってみることにしました。五キロほど離れた隣村ですが、人気のない山道を越えなければなりません。村近くになると、勝五郎は来たことのないはずの道をどんどん進んでいきました。そして「この家だよ」と一軒の農家に入りました。その家の人に聞いてみますと、勝五郎の話したことは本当でした。そして勝五郎は亡くなった藤蔵という子どもにそっくりだということです。

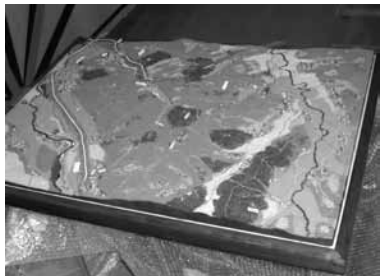
この話はとても評判となり、父親と勝五郎は江戸に呼ばれることになりました。このとき学者の平田篤胤がくわしく話を聞き「勝五郎再生紀聞」と言う本にまとめた



のです。勝五郎は一年ほど平田塾で学び、その後村に帰って、お百姓をしたり竹籠を編んだりして暮らしました。明治二年（一八六九年）に五十五歳で亡くなりました。藤蔵のお墓は高幡不動尊に、お隣の勝五郎のお墓（前頁写真左）は八王子の永林寺にあって、子孫の方に大切に守られています。

この話は明治時代にラフカディオ・ハーンのと知るところとなり「勝五郎の再生」という作品にまとめられて、アメリカとイギリスで発表されました。生まれ変わりの物語は世界各地にあります。藤蔵・勝五郎ほどはつきりと、誕生日、命日・両親や兄弟の名前、家族関係までわかっている例はないそうです。

十年前に、「勝五郎生まれ変わり物語探究調査団」という会が作られました。会員の皆さんは、新たな資料を発掘したり、おばあさんと勝五郎が歩いた中野村から程久保村までの道の



ジオラマを作ったりして、この物語の輪郭をはつきりさせ、世間に広めようと活発に活動されています。世界の無形文化遺産になってもいいほどの話だ、と大きな夢を語る方もおられるようです。

今年（平成二十七年）の十月十日は勝五郎生誕二百年記念日にあたり、講演会や資料の展示会など色々な催しが計画されています。どうぞ皆様も興味のある方は、こぞってご参加くださいますようご案内いたします。

（柳澤）

三、小平・小金井・三鷹編

小平・小金井・三鷹と玉川上水

江戸時代、江戸に住む人々が多くなり徳川家康は、大久保藤五郎に命じ小石川上水（のちの神田上水）を作り神田、日本橋の家々に水を送りました。その為、神田上水付近には水に関した地名が多くあります。

井の頭、落合（神田上水と妙生寺川が落ち合う所）、関口、水道橋、お茶の水等…。

江戸の町は大きくなり、日本一の都市となりました。

幕府では、神田上水の水不足を解決するため、武蔵野台地の羽村において多摩川から取水した水を江戸へおくるこ



とになりました。

「玉川上水の誕生です」

工事担当は、庄右衛門・清右衛門の玉川兄弟です。

羽村から四谷大木戸まで四十三km、標高差は九十二m、
ほぼ平坦ですね。

土地を測量するにも機械も無く、夜間、提灯や蠟燭の
明かりで高低差を測量し、何度も失敗を重ねて人力に頼
る難工事だったそうです。

八カ月で四谷大木戸まで掘り進み玉川上水が完成しました。

その功績で玉川兄弟は武士になり以後、玉川上水を守る役人となりました。

この玉川上水堤には吉野、常陸の桜川から桜の苗木を集め多く植えられ、花見客
は堤を踏み固め、桜の花びらは水質を浄化すると考えられていたそうです。

近郊から多くの人が提灯を提げ、見物に訪れるようになり、掛け茶屋等もでて花



見客で賑った。玉川上水沿いの桜は今日も多くの皆様を楽しま
れています。

又、明治になって（明治三年）初めて通船が許され、上水を
汚さないことに厳しく注意がはられました。野菜・炭・薪・
酒等がこの船で運ばれ従来の馬、人力で運ぶのと違って早く、
運賃も安く運ばれました。



しかし僅か二年で上水の汚れなどの理由で通船が禁止されました。

現在玉川上水は

上流部：羽村から小平監視所まで

多摩川から取水されたものがそのまま流れている。取水された大部分は多摩湖（村
山貯水池）狭山湖（山口貯水池）に送水され水量が調節され東村山浄水場で利用さ
れている。又、小平監視所からも直接送水されている。

中流部：小平監視所（野火止用水と玉川上水分水地点）から浅間橋まで

一九六五年（昭和四十年）淀橋浄水場の廃止で玉川上水の送水が廃止され空堀となる。一九八六年（昭和六十一年）清流復活事業により玉川上流水再生センターで二次処理した下水を分流している。

下流部：浅間橋から水道局新宿営業所（四谷大木戸）までほとんど暗渠化されています。現在は、上水沿いの桜を楽しみ、散歩、ジョギングと人々の憩いの場所となっています。

玉川上水にも多くの楽しい民話が残されています。お聞きください。

小金井から小平にもらった場所

そうそう、上水の事をお堀とか大堀とかよんでいたね。そのお堀を飛び越え

た話があるんだよ。おじいさんから聞いたんだけどね。うちの方の神主さんが四月の花見時に小雨が降っていたので番傘さして小金井橋のたもとの料亭に一杯飲みに出かけたんだって。そしたら、女中さんがやくざたちに、ひどいからかわれ方をされていたらしいの。それを見かねた神主さんが、止めに割って入ったら「どこの野郎だ」ってことになって、みんなでかかって来たんだって。

でもこの神主さんは強くって、一人でやつつけちゃって、六、七人いた男たちは、ほうほうのていで逃げて行ったんだって。そしたら、料亭の奥さんと女中さんが喜んで「お礼に一杯どうぞ」と言ったんで、神主さんはすっかりご馳走になったんだね。そのうち雨も上がったんで店を出ていい気持ちで鼻歌まじりで上水べりを歩いていったんだ。するとやくざたちが十人位でかたまってきた。

中にはさっきの男たちも交じってね。仕返しに来たってわけだよ。その男たちはここいら辺じゃ有名なやくざの親分、小金井小次郎の一家の者だったんだね。



ドスも持ってたらしんだ。それで神主さんは、せっぱ詰ってなんと、玉川上水を飛び越えちゃったんだって。それを見たやくざたちは「何処のどなたか知りませんが、お見それしました。大堀を飛び越えられるなんて、ただ者じゃない」って帰ってしまったんだって。話を聞いた小次郎親分もびっくりして感心したそうだよ。そんなことで、前は小金井小次郎の縄張りだった小金井橋から北詰あたりを、小次郎親分が神主さんにくれたんだって。そこでその辺りは小平になったって聞いたよ。

〈引用作品〉一九九七年一月一日小平市報

小平市では毎年一月一日の市報に、昔から語り継がれた民話、昔からの遊び、習慣等が楽しく掲載されています。小平民話の会の皆様の素晴らしいお力とと思います。

又、小金井市野川沿いの小金井神社の境内の社務所前に二個の石が置いてありま

す。一つには「奉天保九年（一八三八年）四月吉日六十五貫目」とだけある。この石にまつわる伝説を紹介しましょう。

力持ちの長五郎

ある秋の夜、谷保村（今の国立市）天神様の祭礼に、奉納芝居がかかるというので、小金井の長五郎さんは弟と二人で見物に出かけました。着いてみると黒山の人だかりで舞台が見えない。しかたないので長五郎さんはかたわらの大石に上がって見物していました。

しばらくすると二、三人の若者が寄って来て「その石は神の石で若い者の力石でもあるのにとんでもないことをする」と怒りいくら謝っても許してくれません。しまいに「この石を担ぎあげたら許してやろう」と、よもや持ち上がるまいと高を括って難題をふきかけてきました。ところが長五郎さんは「担げたらこ

の石を貰っていくがいいか」と言いました。若者たちがせせら笑いながら応ずると長五郎さんは、「エイツ」の掛け声と共に六十余貫の石を担ぎあげました。弟の方も隣にあった石を持ち上げ、二人揃って「これ、もらって行くよ」と呆然としている谷保村の若者たちをしり目にすたすたと歩き出しました。谷保村から小金井まで二里もありますが、二人は途中で一度も休まず担いで来て小金井神社の境内に奉納しました。



〈引用作品〉 小金井市伝説集

谷保村天神様近辺では今でも神社の力石を小金井の人に持っていかれてしまったと嘆き語り継がれているそうです。

さて、野川、玉川上水、仙川が流れる三鷹市には井の頭公園があります。

この、井の頭公園には弁財天様があり、宇賀神様と言う、体は、蛇がとぐろを巻き、その上に老人の顔があるちょっと不気味な像がまつられています。

宇賀神様のはなし

昔、北沢の松原（世田谷）に、子どもに恵まれなかった長者の夫婦が弁財天に子授けを祈願したところ、間もなく念願の女の子を授かりました。この娘は不思議なことに首すじに三枚のうろこがありました。美しく成長した娘は弁財天のようだと評判になりました。

娘が十六の春、親子三人で弁財天様にお参りに行くと、娘は池の面を眺めながら、「わたしは池



の主の化身です。今日まで育ててくれてありがとうございます」とお礼を言つて池の中に白蛇となって沈んでいきました。

長者は神さまが自分たちの為に白蛇を娘にしてくれたと感謝し人面蛇身の宇賀神様を寄進したということです。今も宇賀神様は五穀豊穡の神様として祀られています。

私たちは井の頭公園を後にして、玉川上水の最終地四谷大木戸へと足を進めました。

そこには、水道局の新宿営業所があり玉川上水は地上に姿を現しました。

立派な水道の碑もありました。

羽村取水堰から四谷大木戸まで玉川上水の旅が終わりました。

(富田、川井)



四、府中・調布・多摩・狛江編

神話・万葉集・民話・災害教訓の伝わる街

赤駒を 山野にはかし 捕りかにて

多摩の横山 かしゆか 遣らむ

武蔵国の国府として栄えたふるさと、府中市郷土の森博物館の一角に防人の妻、宇遅部黒女が、歌った万葉歌碑があります。また、多摩市南野一本杉公園にも同じ歌碑があります。

武蔵国は、現在の東京都・埼玉県・神奈川県のうち横浜市・川崎市を含めた大國でこれをまとめたのが武蔵国府です。国府がおかれた府中市は、千三百年以上にわたる、その歴史的



風景が町のあちこちに残されております。京王線府中駅南口前の再開発工事現場で、二〇一四年七月十日「武蔵国」の文字が刻まれた瓦が出土したことがわかり、府中市内の遺跡からの発見は初めての事だそうです。また、大國魂神社周辺には、奈良時代から、平安時代にかけて置かれた「武蔵国府」跡があります。この大國魂神社には、七不思議の昔話があり、その中のひとつ、なかでも良く知られているお話をいたします。

松はきらい

昔むかし、八幡さまの神さまが、大國魂神社の明神さまと武蔵野のはらっぱへ散歩にでかけました。歩いているうちに、日が暮れてきました。あたりがすっかり暗くなって宿屋を探しに東のほうへ歩いて行った八幡さまは、なかなか帰ってきません。明神さまは、真っ暗な夜の林の中で、じっと待っていました。

待ちぼうけを食らった明神さまは「松はういものつらいもの 松はだいきらいだ、まつのはいやだー」ここから、大國魂神社には、待つを松にたとえて松の木を植えてはいけないと言うようになり府中では、お正月の門松にも松を使わないで、竹だけを使うようになったそうです。

他にも、府中市に語り継がれる昔話があります。

おみたらしの大蛇

昔むかしのことです。人見村のおばあさんが、たき木とりに浅間山へ出かけました。わき水のところで少しひと休みしていきこうと思いました。ここにあるわき水は、どんなに日照りが続いても、かれたことがないありがたい水として、村人たちは、「おみたらし」と呼んでいました。おばあさんは、そこに倒れて

いた松の木にこしかけたところ、なんと、松の木が動きだしました。みると、それはひとびとから「おみたらしのぬし」とよばれ、あがめられている大蛇でした。おばあさんは、びっくりして腰がぬけそうになり夢中で山をかけおり、家へ逃げ帰りました。その後、おばあさんはすっかり元気がなくなり、体も弱つてとうとう病気になり死んでしまいました。それからというもの、子供たちは親から「おみたらしのほうへ行くと、大蛇が出るから、遊びにいくんじやないよ」と言われたそうです。またその大蛇は、貫井の弁天さまの池と、井の頭公園の弁天さまの池と、そのおみたらしと、三か所を行ったり来たりしていると
言われております。

〈引用作品〉「口伝え集」府中市教育委員会

多摩川の中流域調布市は、奈良時代頃から、土地の特産物を納める、税のひとつ調として、布を武蔵国府へ納めていました。これが「調布」の地名の由来と言われ

ております。古天神の調布伝説が残っている布多天神社は、京王線調布駅から甲州街道を渡って五分位のところに、古い時代から調布町総鎮守として崇められております。



調布伝説 広福長者の話

昔むかし、多摩川べりに広福長者という、働き者で、村の衆の面倒をよく見る長者がいました。ある日のことです。この長者が、畑に出かける途中、道端でたくさんの小さな種を見つけました。長者は、首をかしげて、「これは一体、何の種だろう」と…この種を全部畑一面に「まいて見よう」と思いました。そうしたところ、そのうちに実がなり、しばらくすると枝いっぱい牡丹雪が積もったように、ふわふわとした真っ白いものが見えてきました。この真っ白

いふわふわしてるものが、何とか村のみんなの役に立たないものかと思い、天神様へ行き七日七夜のおこもりに入りました。すると、不思議なことに七日目の夜、どこからともなく白髪の老人が現れ、布の織り方を詳しく教えて、いつのまにか消えてしまいました。長者はあまりのうれしさに家に飛んで帰ると、さっそく村人達を呼び集めて、今、聞いたばかりの布の織り方をこまかに話して聞かせました。村人達はその話をよく聞いて、布を織り多摩川でさらすことが出来るようになりました。こうして一番先に出来た布を、帝に差し上げたところ、帝は大変喜ばれて、この布を調貢の布とされ、この時より調貢の調と布とこのふた文字により「武州調布の里」(てづくりは、調布と書きます)と呼ばれるようになり、今の調布が出来ました。

〈引用作品〉調布の民話集・布多天神社の栞 布多天神社務所

多摩川にさらす手作りさらさら

なにそこの児のここだかなしき

この時の歌が万葉集にも残されております。また、多摩川の近くにあったこの天神様は、今の布多天神様だと言うことです。

又、調布にある、文化会館をづくり一階エントランスホールのシャンデリアは多摩川で布をさらしているイメージを表したもので、実に見事です。当時の人々の様子がうかがえました。

その後、私達は粕江の図書館を訪ね、更に万葉歌碑がある中和泉に向かいました。約二十分位歩いたでしょうか。多摩川に面した閑静な住宅街の一角に目指すその碑は、ひっそり



と建っていました。玉川碑と呼ばれる万葉歌碑です。かつて、この多摩川は水量が非常に多く、暴れ川でした。文政十二年（一八二九年）にも大洪水があつて猪方村（現在狛江市）の堤防が決壊し、そのとき、残念なことに玉川碑も流失してしまいました。大正十一年これを惜しむ地元狛江の人達と、実業家渋沢栄一らの努力によつて、現在の狛江市中和泉に旧碑の拓本を写して再建されました。

多摩川にさらす手作りさらさら

なにその児のここだかなしき

私達が訪れた日は、初夏を思わせる暑い日でしたが、西河原公園側から見た多摩川の流れは、暑さも疲れもすべて忘れさせてくれ、都会のオアシスさえも感じる事が出来ました。洪水は古い時代から繰り返していました。かつての狛江は、水田や畑が多く、山林が少なかったので燃料に苦



労した家も多くあり、ひとたび大水が出ると、川沿いに住む人達は危険を承知の上、流れに入り、流木を拾い集め、一年中の燃料を手にしたたり、この流木で家の増築や納屋や小屋を造ったりしたそうです。昭和十年代頃には、たくさんのアユが群れて、毎年六月一日のアユ解禁日には花火が上がリ、釣り人や子ども達でにぎわったようです。

そして、この多摩川にも、不思議なお話が言い伝えられております。

河童のホオズキ

多摩川には、河童がいたってな。昔はな、水浴びに行くときは、「河童に尻ご玉抜かれねえように気いつけろ」なんて、親たちに言われたもんだいね。特に、お盆のうちは水浴び行くといげねえって。あるとき、河童がホオズキに化けてね、川のふちに、そのホオズキが落っこつてた。それえ拾おうとした

女の子が、川に引きずり込まれて、はらわた食われちゃったとよ。

〈引用作品〉「狛江・語りつぐむかし」 調布ブッククラブ

今も昔も、親は、子どものことで心配が絶えませんね。

そして、多摩川は、古くから筏流しでも有名で、奥多摩の土場で組まれた筏は品川の六郷まで、川を下りました。筏流しは明治後半がもつとも盛んで、大正末まで続いたそうです。また、多摩川の砂利は貴重な財産で、玉川電車（現在の東京急行電鉄）、そして京王電車、さらに小田原急行鉄道も創業時は、砂利運びを大きな収入にしていた様です。このような多摩川を眼の前にして立って見ますと、かつて、大洪水をおこした事がとても信じられない位穏やかな流れでした。多摩川水害も約四十年前の出来事となりましたが、過去の災害を教訓として残しておきたい事実です。二〇一四年広島で土砂災害が発生し、また、御嶽山の噴火も続き、大きな自然災害に見舞われました。その後長野県北部の地震、阿蘇中岳の噴火等、いつでも、

どこでも誰でも災害にあう危険があります。いつ来るか分からない災害の心構えとして「備え、判断、行動」が、最も大切なことですね。

そして、この美しい自然が永久に続きますように。

（富田・馬場・渡辺）

穴森神社・大森神社の不思議な物語・

多摩川の民話・伝承

大田区を流れる多摩川にどのような民話が語り伝えられているか、調査することになった。多摩川も下流になると、その様子をかえて来ている。羽田空港の存在だ。この人工的な施設に関わる話は無いだろうか。地理的にも多摩川が東京湾に流れ込む最下流である。何かあってもよさそうだ。ここですぐそばにある穴森神社に気がついた。なるほど、神社と言う歴史を守る建物には昔話も民話も良く似合う。穴森神社について地元の方に聞いて



みた。何とさっそく狐の話が見つかった。

御神砂物語

昔、文政の頃、要島の穴守に老夫婦が暮らしていた。老夫は漁に出かけ、日々の糧を得ていた。大漁、不漁を繰り返しながらの暮らしぶりはいつものことながら、たまたま不漁の日が続く、老夫婦の顔が曇ることが多くなった。

そんなある日、近頃には珍しく多くの魚が獲れ、老夫は小舟より魚を魚籠に入れ、喜び勇んで老婦のもとへもどった。

「おばあさん、今日は大漁じゃ、大漁じゃ」

重い魚籠をおろし、老婦に大漁の魚を見せようとした。しかし、重い思いをして運んだ魚籠の中には魚一匹の姿もない。老夫婦は不審げに顔を見合わせ、その魚籠の中を覗きこんだ。その中には、大量の湿った砂が入っているだけだった。

あくる日、昨夜の不審を抱きながらも、老夫はまた小舟をあやつり、漁に出た。幸い、漁は昨日と変わらず大漁であった。しかし、家路につき、魚籠を覗けば、やはり大量の砂があるだけだった。そんな日が数日つづき、あまりの不審に驚き、老夫は村人にこの不思議を伝えた。

その噂は村中に広がり、さまざまな憶測が飛び交ううち、ある村人が言った。「そんな作業は、穴守稲荷に棲む狐の悪さに違いない。そんな狐は捕まえて、殺してしまうのが一番じゃ」

村人は、手に手に弓や矢をもって、狐を探し、遂には狐を生け捕りにした。あわや、狐が殺されるという瞬間、老夫婦が言った。

「どうかお願いじゃ。その狐を殺すのだけは止めてくれないか。可哀相ではないか。それに、もし狐を殺してしまえば、後でどんな報いが村人にあるか判らん。神さまの罰が当たる」

それを聞いた村人は、結局狐を放してやることにした。

老夫は、あくる日からも、常に変わらず漁に出かけた。ところが、漁は大漁であった。しかも、魚籠の中には、重い砂ではなく、魚の姿で溢れんばかりであった。その後、大漁はつづき、老夫婦は大いに喜んだ。

しかも不思議なことに、その魚籠にはなぜか濡れた砂がいつもついていて、それを聞いた村人は、穴守稲荷へ参詣し、砂を持ち帰り、各自の魚籠の中にその砂を入れるようにしたところ、大漁が続いたという。また、ある人は台所にその砂を撒いたところ、その日から訪れるお客も増え、商売繁盛が続いたという。

神社からは意外に海が近かった。多摩川の河口で釣りをしている人を何人か見つけることができた。狐にあやかっているかどうかは判らないが、魚を釣る良いポイントなのかもしれない。笠取山から流れてきた多摩川が、多くの栄養分を含み流れ出る最後のところと考えれば、魚達にとっても都合の良い環境なの



だろう。

丁度、その多摩川の河口には、こんなクラゲの話があることが調査で分かった。

クラゲ骨なし

「蛸にや骨なし なまこにや目なし

かわいいクラゲは 骨抜かれ」

色の黒いのと喉が自慢の古老から

この羽田甚句を聞いたのは

東京の最南端の石張りの

突き出た端であった。

「骨を抜かれたクラゲ」と聞けば

「それがのうー」と多摩川の流れ込む

海を見つめて話してくれた。

竜宮城の乙姫さまが病気になってのう

特效薬は猿の肝だというわけ

そこでクラゲが山からやっとなを連れてきたまではいいが

猿は肝を抜かれる話を

盗み聞きしてしまったのじゃ

そこは猿知恵というもの

「山へ肝を忘れて」いうもんで

クラゲは多摩川を上りついていくと

するすると木に登り

「やーいクラゲ 肝は俺の体にあるが

肝をつぶされる話はこりごりだ」と

逃げていってしまったのだ
泣く泣く帰ったクラゲを
魚達がよってたかって
肝を抜くようにクラゲの骨を
抜き取ってしまったのう
とつとつと羽田弁で話してくれた古老は
忠実だったクラゲを捜すように
「かえーそうによう」と
海を覗いた

(稲垣)

皆さんは、大田区にある「大森神社」さまをご存知でしょうか。
京急本線平和島駅からすこし歩いたところにあるこの神社さまには川に関係した
とても不思議なお話があります。

今回はこのお話をさせていたただこうと思います。

大森神社のおはなし

昔、うねうねと流れる川がありました。ある日その川辺
を、柴を背負って歩いてきたおばあさんがいました。川が
海にそそぐあたりの川辺で「やれやれ」と腰をのばし休ん
でいたところ、側の岸辺にそれはそれは見たこともない黄
金に輝く腕ほどの木が浮いていました。

「なんてきれいな木だろう。もち帰るのは畏れ多い」



おばあさんはその木を下流に流してその場を離れました。

しかし次の日、同じ場所へ行くとまたあの美しい黄金の木が岸边に浮いているではありませんか。

「不思議な木じゃなあ」と下流に流しますが、何度繰り返してもその木は同じ場所へ帰って来てしまいます。

「よほどここがいいのじゃろう」と祠をつくり、木が

寄って来たから「寄る」「来る」で寄来よりき大明神としてあがめたそうです。

この寄来大明神が、後の大森神社さまなのです。

〈引用作品〉「大田区の民話と昔話」島田ばく キャロム



また、今回ご紹介したお話では川が舞台ですが、違う資料では、舞台は海で、流れ着いたのは黄金の木ではなくなんと黄金の御神体であったというものもあるよう

です。

ただ、大森神社さま御祭神が、樹木の神様、久々くくのちのみこと能智命であること、そしてやはり寄っては返す波のある海よりは、ひたすら下流へ流れる川のほうが、不思議なことが起こる神秘を感じるので、私はご紹介したお話が大好きです。

海が舞台のお話はまた機会がございましたらお話しいたしましょう。

(加古)

大田区多摩川駅のすぐ近くに多摩川浅間神社があります。その昔、源頼朝の夫人政子が出陣した夫の後を追ひ、この多摩川まで来たのですが、足に傷を負ってしまいました。近くの亀甲山から美しい富士を眺め、夫の武運長久を祈り、この地に浅間神社を建てたと伝えられています。このあたりにも「富士講」がありますが、神社の境内にはその富士講中興の祖・食行身祿じきぎょうみろくの石碑があります。



この石碑は幕末の快男児・勝海舟の直筆と言われています。

このような話も語り伝えられています。日本の高級住宅街、田園調布四丁目あたりを昔「ムロセンゲン」と呼んでいたそうです。今はその名も忘れられています

：

ムロセンゲンの話

多摩川が暴風雨にあって氾濫するとこのあたりは水浸しになり人々は家屋を失い飢餓に苦しみました。

茂平はそこに住む百姓で年をとってから庭の膨れあがった土の池ぶくれに室を造って農作物を蓄え、すこしずつ売りさばいていました。

ある台風の時、村中が流され、人々は口に入れる一粒の粟もなくなっていました。信仰の厚い茂平は室のものをことごとく村人に与えました。そして、くたくたになって室に戻った時には、もう芋の一片もなく、生きる力も無くなっていました。

最早これまでと土壁に南無観世音菩薩と指先で書き終えた時、暗い室の中に一筋の黄金の光が茂平にさし観世音菩薩が現れました。

「茂平よ、苦しむ人々への施しはこの私にしてくれたもの。あなたはこれより極楽浄土で暮らさない」と菩薩の差し伸べられた腕に抱かれ、天上に行つたのだろう。茂平の遺体のないその室を、ムロセンゲンと言っていたそうです。

多摩川にはこのような不思議な話もあります。

多摩川の医者を迎えにきた狐のおはなし

多摩川沿いの沼部にある医者所に、子どもが病気だからと女のお籠を
用意して迎えに来ました。

大きな火鉢のある立派な家だったのですが、「もう子どもは助からない」と
いったところ、何もかも消えて、おたふく山の中に座って
いた。そばには大きな切り株があり、狐の赤ん坊が死んで
いた。翌日、医者家の外にカモが一羽置いてあったと。

同じような話が多摩川の対岸、等々力村分（分というのは
多摩川で分けられてしまった村の事です）の辺りでも伝
えられています。



等々力村のお医者さんが寝ていると、美しい娘さんが迎えに来て病人を診て
下さいと言いました。娘さんに連れられてお籠に乗って多摩川の渡しに行き、
舟で多摩川を渡り案内されて家に着くと、奥の間に妊婦がいてぐったりしてい
ました。お医者さんが妊婦のお手当をする間もなく可愛い元気な女の子が生
まれました。薬を置いて帰ろうとすると娘さんが「私たちは狐です。狐は診て
もらえないと思い、みんなで人間に化けていたのです。申し訳ありません」と
膝をついて謝りました。

お医者さんは「人であろうが、狐であろうが生きるものを治すのがお医者さ
んだよ」と言って笑いました。それ以来、夜の往診の時は狐たちがつきそって
お医者さんを守ったという事です。

今では信じられないことですが、この頃は狐も多摩川を自由に往来していたのか
もしれませんね。

（山田）

文責	稲垣昂志 加古万里子 川井方子 富田和美 富田元子 馬場エリカ 平野啓子 柳澤淳子 山田圭一 渡辺真記（あいうえお順）
協力	羽村市、八王子市、日野市、小平市、小金井市、三鷹市、多摩市、府中市、調布市、狛江市、大田区、川崎市 八王子市・日野市の郷土資料館 日野市の中央図書館と平山図書館 日野宮神社氏子会 土方歳三資料館 府中市・調布市・狛江市各図書館、資料館 布多天神社 元羽村市長 井上篤太郎様 羽村市長 並木心様 有吉 敏様 元横浜市史資料室調査研究員 松本洋幸様 NHK文化センター八王子教室 NHK文化センター八王子教室 「平野啓子語りの世界」受講者全員 美しい多摩川フォーラム地元出身の会員、地元の皆様
指導	平野啓子
企画・製作	美しい多摩川フォーラム・教育文化部会
制作	美しい多摩川フォーラム
発行	美しい多摩川フォーラム 東京都青梅市勝沼三一六五 青梅信用金庫内
発行日	電話（0428）2415632 平成二十八年三月一日

この冊子に収録した物語は、公益財団法人とうきゅう環境財団の多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究助成金（二〇一四年度～二〇一五年度）を活用して掘り起し、平成二十七年三月四日羽村市生涯学習センターゆとろぎにて開催した「多摩の物語」の語り会に於いて、各物語の執筆者自身が「語り」で発表しているものである。

※無断転載禁止

「多摩の物語」(民話・昔話)の掘り起し調査と“語り”の実演

(研究助成・一般研究VOL. 38—NO. 223)

著 者 平野 啓子

発行日 2016年11月

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>